

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受審判第六二七号
昭和三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成二十一年二月一日発行(第四百十二巻第二号)

ホトトギス

二月号



俳句随想 〔三三二一十〕

汀子

平成二十年度の国民文化祭は茨城県大子町で開催された。前日の吟行地である袋田の滝に参加しないで私は母校の創立八十五周年の祝賀会に出席し最終便で上京してホテルに直行することになっていった。着くのは多分十二時になるのではないかと連絡してあった。

宿泊するホテルは袋田の滝へ左折しないでもっと山深い場所にあるゴルフ場のクラブハウスがホテルになっていた。案内順調に行き十一時過ぎには着いた。誰も居ないカウンターのベルを鳴らしたが誰も来ない。ここはゴルフ場のクラブハウスだけで夜は誰も居ないのではないかと急に心配になった。何度も声をかけていると、間もなくカウンターの奥から年取った女性が現れて、我々が着くのが十二時頃と聞いていたのでその積もりだったと言った。外は震え上がる寒さであったが、案内された部屋は暖房が効いてほっとした。朝の会からずっと緊張し続けて遙々着いたホテルで漸く人心地がついた。誰も居ない中庭に出て空を仰いだ。満天の星穹である。疲れが一遍に消し飛んだ。これまで星を見たいと夜空を仰いで果たせなかった私に思いがけない自然の贈り物であった。

旬日記

汀子

平成二十年二月二日菅屋ホトギス会

結界をほどき春待つ心切
冬桜日比谷通りは素通りに
寒桜の行き届きたる夕べかな
碧梧桐忌とて親しむ心別

二月三日 関西野分会

節分の雪に欠席てふ電話
つながりし消息古都の雪の朝
初午の幟に雨の朝かな
紅梅の紅に染まりて雨雲

二月三日 下萌句会

待春の心にゆとりあることを
なやらひの福豆とこそ配らるる

二月四日 ロイヤル俳壇

立春の心ほどけて行く日差
寒椿咲き余るてふことなく
雪折とならず戻つてをりし竹
金星に立春の朝はじまりぬ
金星の夜空ゆづりて春立ちぬ
悲しみを拭ひたまへと春立ちぬ

二月八日 工業倶楽部

東京の雪解の早さありにけり
ただならぬ余寒の旅となりしこと
六甲の山頂春の雪もよひ
あなどりてをりし余寒につかまりし
春らしきよそほひはまだ先のこと

二月十日 高知国分寺汀子句碑除幕

分身の句碑梅が香に包まるる
快晴でありつづげんと梅冴ゆる
二月十一日 大阪倶楽部

猫柳今日水音の高きこと
たもとほる梅の香れるところまで
旅の日はや遠ざかる梅二月
春浅しさらに雨冷え加はりて

二月十二日 綿業倶楽部

雨の替には稿債をよせつけず
二も又梅はこづをいざなへる
梅咲けば次々控へゐる行事
早春のひと雨いとふこともなく

二月十三日 岩岡中正句集序句

春寒くとも快晴を約せし日
二月十四日 清交社
火の山の春めく大地踏みしめて
茹でおきし春菊のあり一人の餉

色逃がさざる春菊の茹で加減
水仙の香を纏いつつ席に着く
大会の近づく不順をかこつ日々
駄挿すは広き琵琶湖のどの辺り

二月十七日 野分会

先繰りは船場ことばよ寒明くる
初午に立ち直りたる日和かな
魁けて満開となる濃紅梅
快晴といふ冴返る明るさよ

二月十八日 アサヒカルチャー

春寒をかこつことより旅路かな
限りなき空の変幻春の雪

二月十九日 有恒倶楽部

電話より移されさうな春の風邪
片栗の花の愁ひに佇みぬ
春寒の旅路を解く家居かな
かまくらに余りし雪をならしけり
あなどれぬ春の風邪とはなりにけり
旬日の一家全滅春の風邪

二月二十日 夏潮句会
残雪のあれよあれよと消えにけり
計画のいつよあれよと消えにけり
クロッカス大地目覚めてゆきにけり
頁繰る庭物語梅咲けり
週末の会の近づく梅の庭
準備とはどこかが不安春寒し
計画は着々春の寒くとも

二月二十六日 無名会

鳥の来てこぼす梅の香なりしかな
大会の済みて余寒のとどまれる
灰色の空背景に濃紅梅
会場にせめて余寒のなきことを
枝垂梅にも白梅の香なるべし

二月二十八日 きさらぎ会

やうやくに二月礼者として会ひぬ
山頂は通行止よ残る雪
飛機降下富士の残雪見て揺れて
アルプスを終へし心に梅二月
大会を終へし心に梅二月

二月二十九日 時雨会

白魚のお清汁もつく幕の内
風二月荒れて列島縦断す
東京の滞在三日春寒し
健康を取り戻されし二月かな

廣太郎句帳

廣太郎

蕉像も雑誌の取材受けうらら
二月十四日 土筆会

いぬふぐり羽音は通り過ぎてゆく
日の本といふ寒明の一部分

平成二十年二月四日 はせを句会

バレンタインデーうはうはとうきうきと
鶯の訛に 吉野杉 揺るる

二月二十六日 若水句会

残雪を玻璃に映してビル寡黙
白々と明けて都心に春立ちぬ

片栗の咲けば消えゆく山河かな
鶯に 吉野の朝色 付きぬ

白きもの連れて余寒の都心かな
梵天の熱気に鳥居狭過ぎる

九春のプレリウドとは白銀に
白銀に染め上げ君は雪女郎

二月十九日 草木瓜会
冴返るとは大都市を白銀に
シクラメン二十歳になれる君の目に

二月二十六日 百夜句会
花時計二時半辺りクロッカス
独り言 呟く 人に余寒かな

二月六日 一水会

早や旅の予定ぎつしり二月かな
一輪の梅ほどに君笑まひたる

雀等の声 高々と 冴返る
二月二十一日 登高会

二月二十六日 軍靴響きし夜
実朝忌虚子の恋せし五山かな
絵踏せるごとき君への誓ひかな

薄氷の下に命の芽生えかな

寒明けてまだちらちらと白き使者
寒明けてよりの六甲嵐かな

かまくらに幼き恋の芽生えかな

二月七日 蕉心会

早春といふ下町の素顔かな
早春は蕉像の色水の彩

猫の顔二月の鬪志秘めてをり
風音に水音に 二月の唱

二月二十七日 目黒学園句会
海苔粗朶に 東京湾の甦る
海苔搔の背中が見えてより 礁

寒明くる猫の鼻先ありにけり
春の雪路地に淋しく固まれり

寒明や 旅心とは 里心
二月やそこの猫何しとんねん

芝焼いて若草山は神と化す
牛小屋は廃れしままや畦を焼く

春浅き波の三角錐であり

二月二十五日 朝日カルチャー若草句会

昨夜の星より早春の降りて来る

水上バス貨物船春浅き水尾
恋猫やさうは問屋が卸すかい

青空に友を見つけていぬふぐり
寒明は黒き土より始まれり

昨夜の雨しよしゆん攪つてゆきにけり

雑詠

廣太郎 選

流灯の消え胸中に霊残る 福山 竹下陶子
 詩をうたひ果てたる蟬をてのひらに 同
 八朔の木馬に鞆の歴史曳く 龍ヶ崎 今橋眞理子
 曼珠沙華どこかに黒を秘めながら 同
 初めての町見慣れたる鯛雲 同
 木犀の香の流れくる満ちてくる 同
 六甲の露の底なる熟寝かな 神戸 山田弘子
 夜学生雨の通用門に散る 同
 パソコンも俳書も月に待るもの 同
 遅れたる鯛のあり一た三声 たつの 浅井青陽子
 よろづごと後に委ねし涼しさよ 同
 長かりし残暑を云ひて席に着く 同
 遅々と来る台風に先駆けし旅 長岡 安原 葉
 爽やかや雨の昨日を遠くして 同
 月の句を詠みきれざりし哀しさよ 同
 よく晴れて火星の水も澄みをらむ 東京 大久保白村
 見たい子になかなか見えぬ流れ星 同
 子が見つけ父が見落とす流れ星 同

待宵に懸る薄衣めきて雲 樞原 稲岡 長
 釣針の食ひ込んでゐる鯨の顎 同
 立待の月正面や勇み帰る 同
 庭隅のうつろとなりし萩刈つて 福岡 松尾緑富
 旅話楽しく聞きぬ秋うらら 同
 新聞を取りに朝寒覚えつつ 同
 森ひとつ供華とし沼の良夜かな 神戸 長山あや
 もの思へとや十六夜のそれも雨 同
 雨音をいさよふ月の声と聴く 同
 整ふといふは小間切れ鯛雲 香川 湯川 雅
 秋晴や影凸凹に磴を這ふ 同
 紅葉して櫛もう隠れなき一樹 同
 ひたすらに來たる花野に海見え來 熱海 嶋田一步
 迷子にはならぬ花野の径である 同
 花野暮れ北海道もやつと暮れ 同
 病むことは代はつてやれず林檎むく 同 嶋田摩耶子
 相づちを打つも看取りや鉦叩 同
 夕焼の這入り來面会謝絶室 同
 かりがねに近江の国の湖明り 東京 橋本くに彦
 初雁に堅田の水の透き通る 同
 三井寺の鐘の音遠く雁渡る 同
 どこまでも空を広げて鯛雲 神戸 涌羅由美
 赤とんぼ群れる高さに風のあり 同
 秋天に吸ひ込まれゆく逆転打 同

雑詠句評（二月号より）

眞理子・静龍・美奇
芳子・保佳・千鶴子
むつみ・葉・憲明
中正・とほ歩・廣太郎

霧の上に霧その上に霧の闇 八尾 岩垣子鹿

高原かあるいは山の上であろう。深い霧に閉ざされると視界ばかりでなく昼の光も夜の闇も奪われたような気がしてくる。「霧の上に霧その上に」と積み重ねるように詠んで、手を伸ばせばつかめそうな霧の質感を大胆にとらえて斬新である。夜の闇さえも押しつけるように窓をおおう霧に押しつぶされそうな感覚がひしひしと伝わってくる。（眞理子）

季節になると、六甲山などは「霧」が深くなり、それこそ視界が殆どゼロに等しくなってしまう事がある。この句も、そんな山の霧が先ず想像出来、作者の視点も見て取れる。作者の視点も見て取れる。平面的に出ている霧というよりも、三次元的な立体感

が感じられ、季題を三つ重ねた事によるダイナミックさも感じられる。（廣太郎）

六甲はわが俳枕 星月夜 神戸 山田弘子

六甲山は私の俳句のよりどころとしている山で今宵は星月夜が良く見られますよという存問の御句である。六甲については詳しく知らない筆者であるが六甲山は神戸市の北側に位置し屏風のような九百米余りの山並みで、その山頂付近には行楽地や別荘がある所として知られている。作者はその六甲山麓に居住し四季折々の山の変化を楽しみ、しかも六甲を俳句の抛り所として作句しておられるのである。今日、都会にはビルの明かりや街路灯など都市自体が明るく光が溢れているので星空など見ることができないと言われているが、作者の居住地の空には星空が見られるのである。大都会の傍にありながら六甲という場所には自然がまだいっぱいいる場所で星空まで見られる所であることが簡潔に述べられている。（静龍）

こちらははつきりと「六甲」という地名が詠まれている。六甲山は、神戸市に広く連なっているいわゆる連山のようなものであるが、その麓に住まわれる作者にとつてはこの上もなく親しみのある場所である。その心持ちが「わが俳枕」の一語で、又季題を通してひしひしと伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

江子選

日照雨して露けき吾となつてをり
 俳人の手紙 三行鳥 渡る
 熊本 岩岡中正
 手花火に闇の歪んでをりにけり
 東京 稲畑廣太郎
 子等の夢線 香花火に膨らめり
 同
 雨そぼつより十六夜の酒となる
 箕面 井上浩一郎
 向き変へて石たたきまた走り出す
 同
 詣で去る一人子規忌の雨に濡れ
 長岡 安原 葉
 寝待月待ちつつ老の一睡り
 同
 霧に入り霧を抜けたるときに湖
 八尾 岩垣子鹿
 葛城の神々隠す時雨かな
 同
 穂芒や影の先まで風棲める
 神戸 長山あや
 日陰れば湖北の風の冬近し
 同
 藤袴淋しいときの色に咲く
 東京 今井千鶴子
 紅萩に白萩に人遥かなり
 同
 蟬どちや今争うて何になる
 豊中 瀧 青佳
 昼寝覚め平凡な頭かかへたる
 同
 瀨祭忌とはにつゞけるめでたさよ
 たつの 浅井青陽子
 城門をくゞり月見の席探す
 同

阿波踊果てし円月誰も見ず
 徳島 上崎暮潮
 残生は俳句一本盆の月
 同
 朴の葉の二枚揺れぬる秋の風
 樞原 稲岡 長
 文使めき文月の届け物
 同
 なやらひの闇に八大地獄あり
 福山 竹下陶子
 妻ともに八十路の豆を少し撒く
 同
 秋晴の一語にて足る朝の卓
 千葉 増田善昭
 野は暮れて山まだ暮れず秋の晴
 同
 いびつなる個性を見せて榎榎の実
 福岡 松尾緑富
 逆立ちをするかに生りて榎榎の実
 同
 玉杯のありつつ月の待たれつつ
 神戸 後藤比奈夫
 月の出を待ち 男酒 女酒
 同
 ほどけたることは咲くこと 芒原
 熱海 嶋田摩耶子
 大島を隠す芒を刈るテラス
 同
 赤のぼりつめゆき葉鶏頭となる
 同
 葉鶏頭旅の歩みにぶつかりし
 同
 病室に 思考 深まる 秋燈 下
 吹田 宮崎 正
 恢復へ感謝する日々 爽やかに
 同

天地有情句評

汀子

詣で去る一人子規忌の雨に濡れ 長岡 安原 葉

俳諧への真摯な姿。

霧に入り霧を抜けたるときに湖 八尾 岩垣子鹿

霧を生む湖が見えかくれ。

俳人の手紙 三行鳥渡る 熊本 岩岡中正

穂芒や影の先まで風棲める 神戸 長山あや

簡潔。

穂芒と風の詩心。

手火花に闇の歪んでをりにけり 東京 稲畑廣太郎

藤袴淋しいときの色に咲く 東京 今井千鶴子

闇に生れた造型美。

淡い藤袴の色に誘われる淋しさ。

雨そぼつより十六夜の酒となる 箕面 井上浩一郎

昼寝覚め平凡な頭かかへたる 豊中 瀧 青佳

酌み交わす十六夜の雨

非凡な頭のやすらぎのとき。